



ミクロネシア NEWS

2019年9月13日第12号
JICA 青年海外協力隊
ミクロネシア連邦派遣
小学校教育隊員
磯崎 春美（中野区立江原小学校）

江原小学校のみなさん、カセレーリエ！ヤ、イロム？（お元気ですか？）夏休みも終わり、新学期が始まりましたね。普段挑戦できないことにチャレンジしたり、行ったことない場所に旅行に出かけたり、すてきな思い出ができたでしょうか。ポンペイの学校は8月12日から新学期が始まりました。登校初日は子どもたちが自分の教室を探すために校舎を歩き回ります。かわいい1年生も一生懸命教室を探し、どの先生が担任になるのかをわくわくしながら確かめていました。



日本との違い①入学式がない！（始業式のようなものを体育館で行いました。）

日本との違い②出席日数が足りない、成績がよくないともう一度同じ学年で学習する

日本との違い③学校が始まってから転校生が無限にやってくる。2年生だけで30人くらい当初の人数より増えました。（人数が増えすぎるとクラスが増えたり、先生が他の学年から移動になったりします。）

さて、今回はミクロネシアについて書かれた本を3冊みなさんに紹介します。図書館にない本もありますがもし出会う機会があれば読んでみてください。

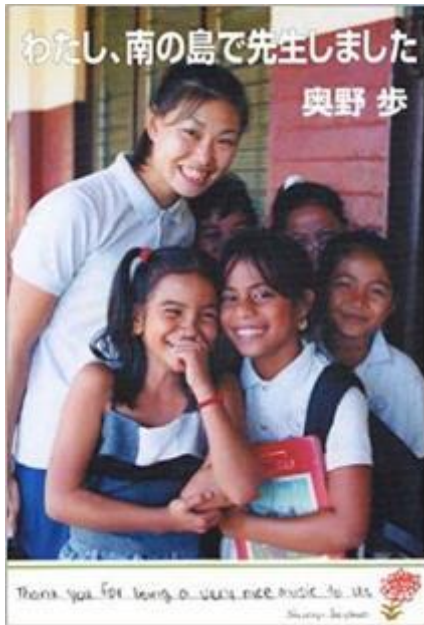
南の島のティオ(文春文庫) 著者:池澤夏樹



この小説では、小さな南の島でお父さんが経営するホテルで働く少年ティオが主人公です。島の名前は違いますが、すべてポンペイの地名、島、山がモデルになっています。

ホテルに訪れる個性的なお客さんや、ほかの島からきた少年との出会いについて書かれています。短編で読みやすく、中学年から高学年のみなさんにおすすめです。ポンペイ島の人々の生活の様子や素晴らしい自然について知ることができます。ポンペイには昔から神々にまつわるたくさんの言い伝えがあります。そんなポンペイの伝統や自然、友情を大切にして生きていく主人公ティオの物語です。読みやすく、一番みなさんにおすすめしたい本です！

わたし、南の島で先生しました(翔雲社) 著者:奥野歩



著者の奥野さんは青年海外協力隊として南の島に派遣された音楽の先生です。私と同じようにポンペイの小学校で2年間働いていました。

日本の子供たちとは全く違う南の島の子供たちとの多くの触れ合い、その中で悪戦苦闘しながら前向きに行動していく奥野さんの姿に、私もとても励まされました。文化の違いによる多くの戸惑いなど、筆者のさまざまな思いが書かれています。

例えば、ポンペイは湿気がすごいので持ってきたものがすべてかびってしまったという体験(洋服、割りばし、本の表紙、そしてなんと塩も!)や、逆に湿度が高くて乾燥肌が改善したということ。また手作りクッキーを校内で販売して新しい音楽室を建てるための資金にした。というように驚くようなお話しがたくさん書かれています。たしかにポンペイでは洗濯物を干しても湿気でいつまでも乾かないので、乾燥機は必須です。

「冒険ダン吉」になった男 森小弁(産経新聞社の本)著者:将口泰浩



ミクロネシア4州のひとつチューク州。このチュークに一人で上陸し、商業をはじめた森小弁について書かれた実話です。ミクロネシアの4州はもともと、日本に統治されていました。今でもなお、日本人の血を引いた人達が多くいます。特にチューク州には「モリ」という名字を持つ人たちが多くいます。前々大統領も「モリ・エマニュエル」さんという方でした。どうしてモリ家が多くいるのか、それは100年以上前に、高知からチュークに渡った森小弁という人物がいたからです。かなり難しい本ですが、挑戦したい人は探してみてください。

以下ホームページ「JBpress」(jbpress.ismedia.jp/articles/-/22633)から引用。

『1869(明治2)年に土佐藩士の家に生まれた小弁は、同郷出身の板垣退助が率いる自由民権運動に感化され、10代の頃から政治家を志す。しかし、力まかせの運動は実を結ばず挫折、やがて日本の政治そのものに失望するようになる。折しも日本では、南洋貿易や移民で国力増強を図る「南洋進出論」が沸き起こっていた。小弁は「南洋で自由な社会をつくろう、食うに困った日本人を受け入れよう」と決意。貿易会社の船に乗り込んで、たった1人で南太平洋のトラック諸島(現在はミクロネシア連邦チューク州)に上陸する。22歳の時だった。トラック諸島は、腰みのを巻き、顔と体を彫青で飾った先住民が暮らす未開の土地だった。だが、小弁は現地の生活に同化するよう努めながら、日本との貿易を切り開く。』

読書の秋が近づいてきました、まだ行ったことのない場所や国について書かれた本を読んで「読書で世界旅行」をしてみてくださいね!